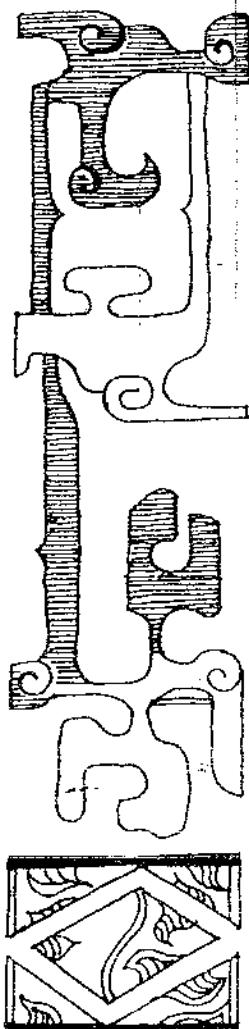
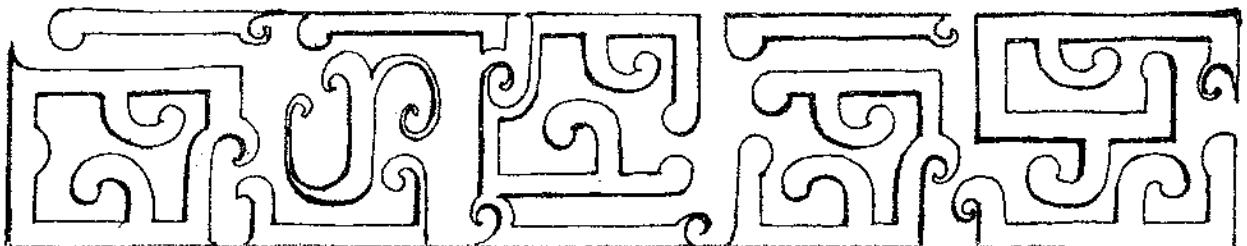
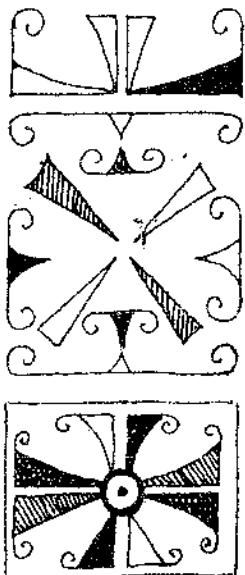


# NEWS LETTER

Volume V



DEC. 1993



## 目次

- 米の凶作に学ぶこと 石田紀郎 1
- 省農業ミカン園で私たちが何をしているのかお話ししましょう 橋野亜貴
- 異常気象の中のミカン 小林由佳
- 冷害に考える 美山透
- はじめての省農業ミカン園 浅井元朗
- ミカン園の壁蟲と蜘蛛 一九九三年の栽培管理法、病害虫の発生状況
- ミカン山を通りて 初めて調査に参加して
- 農業の大変さ 宮川功
- 食いしん坊のルーキーより 藤井亜希子
- 小鳥のささやき 藤田美佳
- ミカン山でちょっと考えた 倉田尚子
- 高野浩 西出香
- 松本崇

13 12 12 11 11 10. 10 8. 6 4 1

### 米の凶作に学ぶこと

梅雨がこれほどまでに長く続いた年はない。五十年に一回、あるいは百年に一回の異常気象とか、現代の日本人だれもが経験したことのない長い雨期と日照不足は稻作を基本とする日本の農業をとことんまで追いつめた。作況指数が全国平均で七十五という。東北地方の米地帯で三十とか二十九とかという。青森県の木造町では一本の穂につく粒は百粒あつたが、中味のあるのはわずかに一粒であつたという。大凶作である。ほんの四十から五十年前なら、餓死者が出ても不思議ではない作柄である。

なぜ、こんなことになつてしまつたのか。もちろん、

第一の原因は異常気象であろう。だからといって、異常気象にだけ責任を押しつけてしまうのは、おでんとうさまに申しわけない。天災は人間の思惑の外から何時だつてやつてくる。人間はどうしようもないときらめ顔でいうのは間違っている。まずはこの世の中で起る災害はすべてが人災だと考えて、そこから立ち上ることがの方が大切だろう。今年の米の凶作からどんな教訓を引き出すかが問われていると思う。

今年の凶作は、機械化を押し進め、化学肥料と農薬で生産を高め、裏打ちしてきたと自慢していた今の農業技術が、大敗北を喫したのだと捉える必要がある。化学肥料を与える肥培方式ではなく、有機質肥料を主体にした土作りに専念し、水管理などに気を配つてき

た農家の作柄は平年作の七割とか八割を確保したという。豊かな土で病害虫に耐える強いイネの栽培が、この異常気象にも充分抗した事実が次々と報告されている。現代農業技術の底の浅さを見せつけられたよう気がする。人災ではない災害などはないと肝に銘じるべきであろう。農学のはしつこにいる私もまた同じである。異常気象、冷害、凶作の事態の前で、天気が悪いから仕方がないという言い訳は通用しないのだと農業、農学関係者がまず思いを正さなければならない。農学の敗北として、今年の凶作を捉えるところから、もう一度仕切り直してみるべきだと思う。

(石田 紀郎)

### 省農業ミカン園で私たちが何をしてお話しします

今回お届けしたミカンは、和歌山県下津町の山の中にある省農業ミカン園でつくられたものです。昨今では、安全な食べものを求める消費者側と、環境や健康を守ると共に農業の本当の姿を求めようとして有機栽培、無農薬栽培をする生産者側との歩み寄りによつて産直運動がさかんになっています。この産直のメリットの一つは、生産者と消費者の顔の見える関係にあります。そこで皆さんにもこのミカンの故郷、省農業ミカン園について、生産者である仲田さんと松本さんについて、そしてそれにかかわっている私たち農業ゼミ

について少しお話しましょう。

この省農業ミカン園は一九七三年、今からちょうど二十年前に始められました。農薬中毒で息子さんを亡くされた松本さんの弟である仲田さんが、新たにミカン園を開く際にできるだけ農薬を使わずにやつてみようと試みたのです。詳しいことは書くと長くなってしまいますが、興味のある方は農業ゼミの最年長者である石田紀郎の著書、「ミカン山から省農業だより」（北斗出版）を読んでいただきたいと思います。その中にはなぜ農業ゼミがこのミカン園とかかわるようになつたのか、ミカン園を開いて十五年の間にどんなことがあつたかも書かれてありますので、ここではそれ以降のことを中心に書いていきます。

調査や作業に行く私たちの泊まる「悟の家」ができるた  
のが八年前。年に二回の夏と秋の定期調査（後述）も  
軌道に乗ってきました。そして五年前には悟の家にお  
風呂がつきました。夏には昼にかいだ汗を流し、秋や  
冬には冷えた身体を暖めることができるようになった  
のです。でも、良いことばかりではなく、その年十月、  
仲田さんが刈り払い機での草刈りの最中に足を滑らせ  
て転倒し、重症を負いました。急な斜面での仕事です。  
しかもミカンの木が大きくなつて作業もしづらくなつ  
ています。除草剤に頼るのも仕方ないかも知れないと  
つい思つてしまひます。もちろん急斜面で除草剤をま  
く仕事もたいへんであることにはかわりありませんが、

でのことについては前述の著書に詳しく書いてあります。すので、ここ五年の様子を少し述べたいと思います。一時はミカンの木を枯らすほどまでに勢力をもつていたヤノネカイガラムシは、六年前に導入した天敵についてこの五年で確実に減少しました。しかし今年秋の調査ではまた少しヤノネカイガラムシが増えていたようであり、天敵と害虫の数のバランスが今後どのようになつてゆくのかに注目したいと思っています。他にはアカマルカイガラムシという害虫が一昨年始めてこの省農薬みかん園で発見されましたが、その数は極めて少なく、その後の調査でも見つけることはほとんどありません。病気については昨年の春、三年ぶりに殺菌剤を散布したため、昨年のミカンはソウカ病のほとんどない、きれいなミカンとなりましたし、今年も比較的外観のきれいなミカンであるような気がします。ただ、昨年は殺菌剤をまいたせいかアブラムシとダニが大発生し、農薬をまかずにはいた前年までよりもミカンの木が汚くなつたように思われました。いくつかの幼木では全ての枝にルビロウムシがびつしりとついたものがあり、その糖分の多い排泄物にはスス病というその名のとおり真黒いすす状の病気がつきやすいために大変汚い木となつてしまします。しかし大きくなつた木ではそのように汚い木はほとんど見られなくなりました。調査を始めて十五年、私たちが得た結果は、「農薬を減らしてもミカンはできる。ただし、外見は

「よくない。大きさもばらばら。味もまちまち。」  
うことです。今日お届けしたミカンについて、皆さん  
はどう思われたでしょうか。

食糧を得るために、生産者と消費者の顔の見える関係も大切ですが、そろそろ消費者も生産者に要求するだけではなく、自分の食糧を自分でつくつてみる努力も必要なではないかと思います。和歌山でもミカンの木がここ五年でずいぶん減りました。オレンジの輸入自由化や生産調整のあたりを受けているのでしょうか。田んぼも減っています。畑も減っています。農民も減っています。自分たちの食糧を守るのは自分自身だけかもしれません。そんな中で、仲田さんや松本さんに教えてもらわなければならぬことはまだたくさんあります。そういう思いをもちながら、今の自分たちには何ができるのか一緒に考える仲間、それが農薬ゼミのメンバーなのかもしれません。

さあ、ここで一つ、ミカンでも食べて気分をリフレッシュさせ、また明日からの農業について考えていくこうではありませんか。

草刈りに比べると労力はずつと少ないはずです。その年の収穫は全てゼミのメンバーで行ないました。幸い仲田さんの怪我も順調に回復して、次の年には園に出られるようになりました。しかし、昨年八月、今度は松本さんが脳血栓で倒れられ、リハビリのおかげで杖をつきながらミカン山に上がつてくることはできるようになりましたが、以前のようにミカン園と一緒に作業をしたりすることはできなくなつてしましました。松本さんは私達が山にでかけるときはいつも「都会ではできない経験をさせてあげたい」と言つて、オモチつきをしてくださつたり、大きな竹を半分に割つてソウメン流しをしてくださつたりしたものです。仲田さんが怪我をされたときの不安は、仲田さんが回復して月日がたつにつれて忘れられてゆきましたが、松本さんが倒れて、再び不安が蘇っています。私たちは省農薬ミカン園に携わつてはいるけれども、生産者ではない、むしろ消費者であり、「手伝い」はできてもミカンを「つくる」ことはできないのです。農業問題の一つ、「後継ぎ」問題が省農業ミカン園にもあるのです。では生産者ではない私たちとは、ただなにもできないでいるのかと言えばそうではなく（言い訳がましいですけど）、私たちは農薬を減らすと当然増えてくる害虫や病気にについての定期調査を行つています。定期調査のほかには、三月の剪定、五月の花見、十一月の収穫に和歌山へ向かいます。定期調査についても六年前ま

## 異常気象の中のミカン

今年は七月になつても八月になつても、いつ梅雨が多く、しばしば今年の農作物への影響がうわさされました。ではそのような異常気象がミカンにどのように影響したのか考えながら、今回お届けする省農業ミカンの特徴をまとめみたいと思います。とにかく今年のミカンは

一、半年に比べてソウカ病の病斑がすくない。

二、実の大きなものの割合が多い。

三、やや酸っぱい。

ではないでしょうか？

ではそれについて考察してみましょう。

一、ソウカ病について

一般的にソウカ病は植物の柔らかな新梢に侵入して病斑を作ります。ですから四月、五月に出てくる春枝を主として七月、九月の夏枝、秋枝も柔らかな間はソウカ病の感染率がとても高いのです。そして植物が生長してその組織が硬くなるとソウカ病の侵入は少なくなり、たとえ侵入したとしてもあまり植物に影響を及ぼさなくなります。また果実も幼果の時に感染すると病気の程度が一番ひどくなり、いわゆるいぼ型病斑が多くできます（私はミカンの果実表面にいぼ型病斑が多い場合、ひそかに“うにミカン”と呼んでいる）。そ

の後皮が硬くなるにつれて、病斑はかさぶた状のものが多くなります。ですからソウカ病の感染に一番影響を与えるのは春から初夏の間までなので、今年の夏の長雨はあまり病気とは関係なかつたといえるでしょう。

また今年のミカンにソウカ病の病斑が少なかつたのは、たまたま春、ソウカ病の胞子ができる時期に少雨だったのでも胞子の発生が抑えられたといいますが、今年は相対的には、少ないといつてもがさぶたがあるではないかとお思いの方もいらっしゃると思いますが、今年は相対的に少ない方で、特に“うにミカン”的な数が圧倒的に少ないのです。

二、果実の大きさについて

ミカンやカキ、リンゴなどには隔年結果といつて、一年おきに多く実をつける現象があります。うちのミカン園では今年は裏年にあたつて一本につく果実の数は少な目です。例えどのくらい数が違つてくるかといいますと、昨年六百個も果実をつけた木が今年は六十個程しか実を結ばない、というような感じなのです。ミカンの木もひと休みしながらでないと、体がもたないのです。

ただし数が少ないとときには全体的に大きめの果実になります。そのため今年のミカンは大きめのものが多

いのです。

また今年は表に示したように、八月九月と非常に雨が

かります。

また酸度糖度は雨の影響も受けています。特に糖度は九月以降に雨がよく降るとなかなか高まらないようです。今年は九月に大変多く雨が降つたので、それも原因となつて、相対的に糖度が低くやや酸っぱいミカンになつたのでしょうか。ただし、これは私が十月に害虫の調査にいつたときにミカンを食べて感じたことなので、それから一ヶ月後の収穫の頃には酸度が減つてしまつとまろやかで美味しいくなつているのではないでしょ

うか？そう思うと収穫にいつたときにミカンを食べる

のが非常に待ちどうしいです。

表 和歌山県の1993年7月から10月の  
日照時間および降水量

	7月	8月	9月	10月
日照時間 (時間)	112 207	165 228	122 162	167 164
降水量 (mm)	156 149	159 109	292 200	104 111

注) 日照時間、降水量いずれも下段は1961年から1990年  
年の平均値である。

といふわけで一、二、三から、今年の異常気象の影響

は、主にミカンの品質に対しても現れたといえるでしょう。おそらく今年は、天候のせいで全国的に酸っぱいミカンが多いのだと思われます。

ちなんに農業によつて、ソウカ病などの病気や害虫の防除を行つていてるミカン園では、今年は雨が降る度に農薬が流されてしまい、何回も散布し直さなければならなかつたようです。それでは散布する度に手間がかかり（もちろん体にも良くないでしょう）、出費もかかり（もちろん体にも良くないでしょう）、出費もかかるのでさぞ大変だつたことだと思います。その様なことを考えると、今年のような異常気象の中でもほとんどの作業上の変化はなく、無事に実を結ぶことが出来た

が大きいのは九月から十月の日照時間です。表に示すように、今年の和歌山県の日照時間は七月八月に特に少なく、その後九月十月とやや少ない状態になつています。このことから糖度を上げるために日照量がやや不足していることが分

ではないかと思うのです。

最後に、私事になりますが、ミカン山に来るようになつてからはや二年がたとうとしています。毎回調査にしても収穫にしても昼間は皆でわいわいと騒ぎながら、「交尾の為だけに生きるヤノネカイガラムシの雄は幸せか」などいろいろなことを夜もすがら止めどなく話すことは、私にとって、非常に愉快な体験です。

私達はこのように毎回キャンプ気分で来ていればそれなりにデータも集まつて良いのですが、ミカンをめぐる状況は年々深刻になつていています。例えばミカンの味が消費者にとって満足のいかないものである場合、市場で買いたたかれてしまふそうです。確かにミカンなどの果物は毎日食ふすとも支障は出でこないものです。それにオレンジなど、ミカンの代わりになるものはストバーで簡単に手に入るのですが、ますミカンを買わずとも良い状態になつてしまつます。それだけでも大きな打撃だというのに、最近ではミカンをジュースにする加工工場が輸入果汁によつてどんどん衰退しているために、以前であれば引き取つてもらえた品質の落ちるミカンも、ほとんど引き取つてもらえないと。これではミカン農家で生計を立てていくのはまず無理でしょうし、自分の子供に後を継ぐものにはますます無理です。それでもうござります。

それだけでも大きな打撃だと、最近ではミカンをジュースにする加工工場が輸入果汁によつてどんどん衰退しているために、以前であれば引き取つてもらえた品質の落ちるミカンも、ほとんど引き取つてもらえないと。これではミカン農家で生計を立てていくのはまず無理でしょうし、自分の子供に後を継ぐものにはますます無理です。それでもうござります。

また現実的な後継者問題として仲田さんにお聞きした話なのですが、下津町のミカシ農家の息子さんの中に、若い頃は会社に勤めてサラリーマンをして、定年後にまたミカン農家に戻ろうと考えている人が割といふことです。しかしミカン農家のようには体力を使う仕事を、定年後から始めても体が出来ていなかつて難しいと仲田さんはおっしゃつてました。家庭菜園なみに楽しむことは出来ても、それを商売として成り立たせることは非常に大変なことなのでしょう。

こんなことを考え始めると私達が今こうしてミカンの収穫に出来ることが出来るのも、あと少しひのではないかと思えてなりません。本当にミカンはこれから先も作られるのでしょうか、もしかしたら将来ミカン農家がどんどん減り、国産ミカンは高級な果物になつてしまふかもしれない。そんな不安がふとよぎりますが、わたしがそうならないことを願つてこれからもミカンを食べ続けていきたいと考えます。

(小林由佳)

### 冷害に考える

今年は多雨、冷夏がひどがつた。筆者の実家のある九州も水浸しという感じであつた。老朽化した実家は長雨で雨漏りが悪化した。もばや、だだ漏りの状態であり、壁から滝のように水が流れ落ちていた。部屋を水族館にできるという筆者の提案は親に怒られただけだったが、あながち不可能とはいえないなかつた。天井から

はキノコがはえていた。

このようなことは後で笑い話になるが、農家にとつて冷夏は笑い話にはならない。十月末、東北に旅をした。列車の車窓からみる田には、この時期でも多くの稻が刈らずに残してあつた。特に、太平洋側は刈つた稻のほうが多いのかのようであつた。この地方の作況指数は二十から三十だと伝えられている。

さて、今年の多雨、冷夏はエルニーニョと偏西風の蛇行によるものである。このような現象はおおざつぱに言えば、地球が熱のバランスを保つためにおこる。エルニーニョは太平洋の東西の熱の偏りを、偏西風の蛇行は南北の熱の偏りをなくすよう

な働きをする。だから何年かに一度おこるのは地球の自然な姿である。

図1は単位面積あたりのコメの収量である。技術の進歩によつてどんどん収量は多くなっている。しかし、時々、収量の落ち込むときがある。

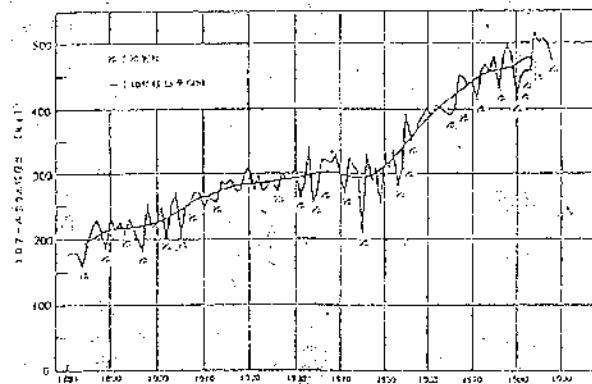


図1 1881年以降の水稻収量変動と冷害の発生状況（岩切 編）  
「気象研究ノート」第171号（1991）より

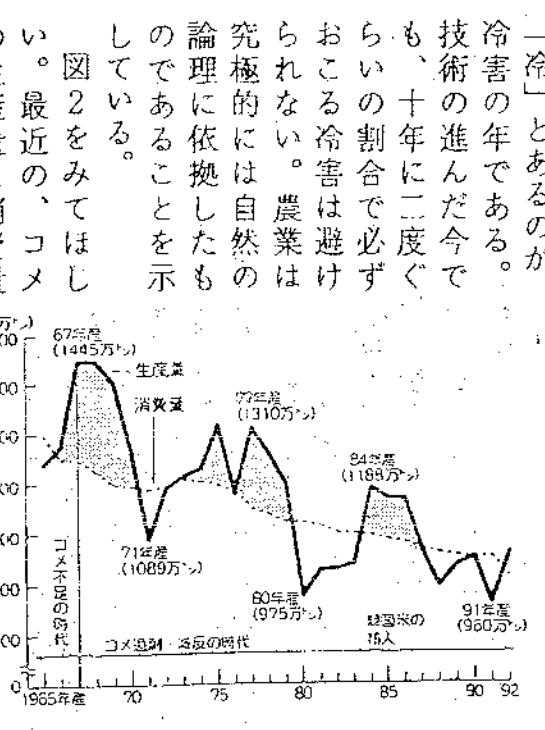


図2 コメの生産量と消費量の推移  
朝日新聞 1993年9月25日より

「冷」とあるのが、冷害の年である。技術の進んだ今でも、十年に二度ぐらいいの割合で必ずおこる冷害は避けられない。農業は究極的には自然の論理に依拠したものであることを示している。

図2をみてほじい。最近の、コメの生産量と消費量をしめしたものである。生産量は数年に一度冷害によるおおきな落ち込みがある。しかし、消費量には落ち込みは見られない。現代の消費者は冷害は関係ない。コメがどれだけできなかは関係ない。ただ必要な量を要求するだけである。せいぜい気になるのは、コメの値段があまり高くなればよいが、ということぐらいか。消費者は自然から遊離している。

いままで、生産量と消費量の差をやりくりしていたが、ついに破綻したのが今年である。よろしい。ならば足らない分は輸入すればよい。ついでに自由化して

しまえば、いつ足らなくなつても大丈夫。消費はこのような方向に進んでいきそうな気配である。ますます、消費者は生産の現場、自然をはなれ、食べ物はつくるものではなく、買うものだということになつていくのだろうか。

現在、地球温暖化が進行中であるといふ。これは地球の熱バランスを大きく変えてしまうことである。このような時代に、消費者はいつまで自然の論理を忘れていられるだろうか。

(美山 透)

### ミカン園の壁虫と蜘蛛

ダニ類の種類は多く、世界で少なくとも六万種が報告されているという。土中の腐植を餌にするササラダニ、他の虫を捕えて食べるカブリダニ、植物の葉を食べるハダニなど、昆虫と同様にその食性を多様化させている。なかでもハダニ類は園芸家を最も悩ます害虫の一つであろう。体長は一ミリメートルに満たず、肉眼での識別は困難である。その増殖力は著しく、急激に増える。この夏も自室のベランダを彩る草花が大きな被害を受けた。マリーポールドに発生した種は図鑑のカズワハダニ、アシノワハダニと思われる。ベランダのよう、直接雨の当たらない環境ではその被害が大きい。できるだけ農薬を使いたくない。発生を確認し

ても、しばらく観察を続けることにする。全ての葉が被害を受け、見るに耐えないと姿になるまで何日と要しない。やがてどこからかハエトリグモの一種がやってくる。忌まわしい害虫ハダニを喰い尽くしてくれるものとの身勝手な期待は裏切られ、害虫と天敵は共存共栄じ、植物の衰弱は止らない。しかたなく何年か前に軒下のアシナガバチを撃退するために用いた殺虫剤に登場してもらう。おそるおそる、必要最小限の薬を吹き付ける。効果あり。枯死寸前だった草花は数日後新葉を展開し始める。ハダニは全滅していない。薬剤から逃れたか、卵が孵化したか、あるいは他所から風で飛来したか。再び増え始め、また同じことを繰り返す羽目になる。

これと似たような状況がおそらく日本各地のミカン園で毎年毎年繰り広げられている。多くの農業書はミカンハダニをヤノネカイガラムシと並んで我が国の大害虫として挙げ、その防除に向けられる資材、労力は少ないものではない。

農業ゼミでは省農業ミカン園の病害虫の定期調査を十数年続いている。一本の樹を何人かで上から下から、葉を一枚一枚めくってカイガラムシを探す。当然、カイガラムシ以外の生物も目にすることができる。調査園にはダニが少ない。少なくとも慣行のミカン園のように重要な害虫ではない。ミカン園に八年通つたが、ダニが“湧く”有様を見たことはまだない。農薬を広

く使用しはじめると、天敵類が減少し、害虫は多種類少害から少種類多害の方向に変化することはよく知られている。なぜ省農業園ではハダニが殖えないのか。

そのしくみをわれわれはまだよく知らない。

農業散布園のクモ群集は自然農法のミカン園に比べて種類、個体数ともに極端に少ないことが報告されている。(北村・保田、一九七八)。ミカンの樹を注意深く覗くと、一本の樹の樹冠内にはたいてい、クモの巣がいくつも張り巡らされている。また網を造らない徘徊性のクモも少なくはない。正確な種は判らないが、アリゲモ、ヒメタモ、ゴミグモを中心に、クサグモ、ワカバグモなど二十種は下らないだろう。

秋の定期調査は毎年十一月初旬に行う。この時期は“秋の空の女王”的異名をもつジヨロウグモ *Nephila clavata* の繁殖期である。ミカンの樹と樹の間に大きな網を張り、その直径は一メートルに達する。注意深いゼミの学生は網を避けてくぐり抜けるが、それと気づかず網を破壊してしまう者も多い。網のはば中に主がいる。これは雌。よく見るとその周辺に一匹ときには数匹、体の小さい別のクモがいる。これらは雄。雌との交尾の機会を狙っている互いにライバルたちである。目撃したいと思つてゐるのだが、まだその幸運に巡り合うことはできない。

ミカンの樹の幹にはアリもまた多い。カイガラムシ

はアリに蜜を与え、アリはカイガラムシを捕食者から保護する。このカイガラムシとアリとの関係はゼミの市岡氏によつて明かにされた。ルビトロウムジやヒメコナカイガラムシの多い樹の幹にはアリが頻繁に往来している。そのアリの徘徊している傍にアオオビハエトリ *Sieralle vittata* を観察することができる。青っぽい体に黒の横縞のある愛嬌のある感じのクモである。クモの多くはアリを食べない。蟻酸が嫌われるらしい。ところがこのアオオビハエトリは「アリ食い」専門のクモである。このクモがアリを捕獲する様はたいへん興味深い。少なくとも動かないカイガラムシを探すよりは退屈しない。

(浅井 元朗)

## 初めての省農業ミカン園

今年も農業セミに多くの新しいメンバーが加わりました。その新しいメンバーたちがミカン山に寄せる思いを書きました。彼らがこれから農業セミを担つてゆきます。どうかよろしくお願ひします。

### ミカン山を通して

(宮川 功)

ミカン山へは「春の花見」と「秋の調査」の二回行つた。花見のときには強い芳香を放つていたミカンの花が、秋に日色をした実に変わつているのを見ると、「たいしたものだなあ」と思つた。しかし、実際に調査に入つて個々の実を見てみると、いろいろな実がある。全くキズがなく、あつたかい日色をした実もある。そうか病などにやられてキズだらけになつてしまつた実もあり、「かわいそうやなあ」とおもつたり、「もうちよつと頑張らんかい」と思つたりもする。

現在市販されているミカンはほとんどきずがなくツルツルの日色をしたものばかりである。しかし省農業ミカン園のミカンは、こんなものばかりではない。農業は毒性があり怖いから、「作物を作るのに農薬なんか使わなければいいのに」という考えを持つた人はたくさんいる。僕もセミに参加する前はそんな考えを持っていた。しかし、実際にフィールドを前にして見ると、今までの考えが頭の中だけのもので、実際に作物を作つていて、「体力」さえ十分なら自ら害虫もはねつけることができるようだ。

私が初めて調査に参加して一週間たつていちばんよく覚えているのはそんなところです。言うまでもなく私は専門知識は皆無でしたが、そういう素人でも調査でできる方法を確立した先人は偉大です。何年もかけて省農業ミカンに挑んでおられる石田先生の息の長さも大したものですね。そして今ひとつ辛抱強さに欠けるらしい私は、労働の成果がすぐみえる収穫に参加しようかな、と思う今日この頃です。

## 農業の大変さ

(藤井 亜希子)

私は想像していたよりずっと美しく健康的な葉や果実には驚きました。ミカンの木に自然に備わった「体力」とでもいうのでしょうか。私はもつと虫に喰われて穴だらけの葉やカイガラムシがびつしりおおつた実を何となく予想していましたから。動物は放つておいたら健康になろうとしますが、当然植物にもその力は備わつていて、「体力」さえ十分なら自ら害虫もはねつけることができるようだ。

嗜好品であるため、古めのように主食として必要とするものではありません。買う人の気に入るかどうかにかかる程度の収穫を保つのは大変でしょう。省農業ミカン園は普通に農薬を使つたミカン園より木の「個性」ははつきりするものなのでしょうか。それはとにかく茂つて「森」の様相を呈している木がありました。夏ミカンのようにごわごわした大きい実からゆずほどしかない実までその種類は様々ですし、隣同志の木で実のつき方が全く違つこともあります。

こういう気まぐれな木をなだめたりすかしたりして毎年ある程度の収穫を保つのは大変でしょう。省農業ミカン園は普通に農薬を使つたミカン園より木の「個性」ははつきりするものなのでしょうか。それはとにかく茂つて、前に「ミカン山から省農業だより」で読んだり、ベテランの人聞くところによると、長い目で見れば害虫も病気も減つてているとのことでした。本当にうつてゐる農家の方や、そうやつてできた作物のことを全く考えてなかつたのだという気がしてきた。僕はまだ、実際の農業のひとかけらも見ていないのだろうけれど、農学を学んだり農業のことを考えていこうと思つたら、実際の農業に接することは絶対に必要なことだと思います。これからもフィールドとの関わりは大切にしていこうと思う。

(宮川 功)

### 初めて調査に参加して

(宮川 功)

山で実際に調査してみると遠くからみてはわからないことに気付くものです。実があ

ればミカンの木々はとても個性的なのです。実があるのかないのかわからないが、とにかく葉が勢いよく茂つて「森」の様相を呈している木がありました。夏ミカンのようにごわごわした大きい実からゆずほどしかない実までその種類は様々ですし、隣同志の木で実のつき方が全く違つこともあります。

山で実際に調査してみると遠くからみてはわからないことに気付くものです。実があればミカンの木々はとても個性的なのです。実があるのかないのかわからないが、とにかく葉が勢いよく茂つて「森」の様相を呈している木がありました。夏ミカンのようにごわごわした大きい実からゆずほどしかない実までその種類は様々ですし、隣同志の木で実のつき方が全く違つこともあります。

## ミカン山でちよつと考えた

(藤田 美佳)

今年は冷夏でした。農業は、何分、おてんとさんのご機嫌を伺いながらの業ですから、專業でやつておられる生産者の方達のご苦労は、消費者の私には想像もつかないものなのでしょう。ミカン山のミカンも例外ではなく、夏の長雨のために酸味がつよくなつたと仲田さんもおつしやつておられました。ミカンはいわゆる

農業のことを考えていると、困つてしまふことばかり出てきて、頭の中が空回りを始めます。これから何回もミカン山に登りおばさんになる頃には蘭車がかみ合います。

私は日本から農業を消したくありません。けれども、農業のことを考えていると、困つてしまふことばかり出てきて、頭の中が空回りを始めます。これから何回もミカン山に登りおばさんになる頃には蘭車がかみ合います。車のライドに白い小さな花が照らしだされました。車のライドに白い小さな花が照らしだされました。ミカン園の中の細い道をうねうねと登つていくうちにミカンの香に酔つてはいるのか車に酔つてはいるのかわからなくなつてしましました。

次に来た時には、もうミカンの青い小さな実がついていました。例年より涼しいとはいえやはり七月。雨上がりの蒸し暑いミカン園での調査に参加しました。じ

つと枝葉を見つめてムシたちを見つけるとちょっぴりうれしくなつてしまつ自分が情けない。一本の木に様々なるムシたちがいて、いろんな関係を作つて生きているといふのはすごくおもしろいことのように思えるけれど、ミカンを作り、生計を立てる人々にとつてはそくばかりも言つてられません。

十月の終わりにミカン園を訪ると、そこには天の河のようにミカンが実つています。どんなにいびつですが、意外ときれいでさわやかな味のするミカンに仕上がつていました。これから糖度が上がるとのことだつたので収穫が楽しみです。このミカンで市場競争力が弱いというのですから、農家の方々の苦労は大変なものだと感じました。このミカン園のミカンの良さや、おいしいミカンを作りたいと努力している人々がいることをもつとたくさん消費者にわかつてもらいたいです。そして、自分自身、ほんとうにいいものつて何だろう?と常に考える消費者でありたい、と心から思いました。

(倉田尚子)

ミカンの木は温かい。なぜ温かいか?ミカンは小さなりにミカンらしいミカンを食べてるな」と思いました。

「お前は食べることしか能がない(それ故に農学科)から食料だけはケチるな」という両親に育てられた食いしん坊が今回の秋の調査でおみやげ用のミカンを収穫するとき、目の色をえていたのは言うまでもありません。「おいしくて体にいいものを食べたい」という強い欲求に導かれた食いしん坊は、これから農業はどうあるべきか、そのために自分は何をしていくべきか、省農薬ミカン園から持ち帰ったミカンを食べながら考えています。農薬を極力減らすこと、有機農業、それらの採算や効率性、そして農政……したじことやらねばと思うことは佃煮にするほどあります。いや食いしん坊でも食べ切るのは無理なようですが、農薬ゼミにはもつと食いしん坊な先輩方が沢山おられます。その中で、新人の私も胃袋のキヤバシティを広げていこうと思っています。

(高野 浩)

### 1993年の栽培管理法、病害虫の発生状況

3月下旬~4月上旬	剪定、春肥(配合肥料 20kg*40袋)
7月中旬	除草剤(ラウンドアップ)を全園に散布
8月~9月	摘果
10月上旬	カミキリムシ退治(鎌でヤニを取る)
10月中旬	秋肥(配合肥料(注) 20kg*90袋)

ヤノネカイガラムシムシの密度は昨年に比べて増加。

そうか病も今年は春芽形成時期(5月位)に雨が少なかったためか、発生程度が少なかったので農薬を一度もまかずにすみました。下津町の慣行農家では殺虫剤、殺菌剤を9回、除草剤を2回位まいています。

注 魚粕、肉粕、菜種粕、塩化カリ、骨粉を混合したもの

(松本崇)

カンは生きている。

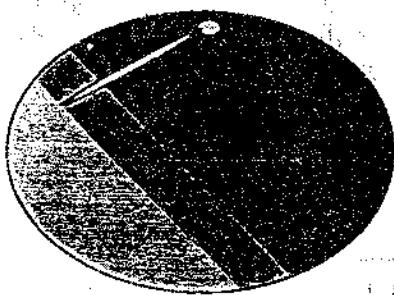
なのにどうして村の人は毒を振りかけるのだろう。ミカンだって本当は虫たちと仲良くやつていけるはずなのに。でも人間は、ほんの一部の悪い虫をなくすため、多くの良い虫まで苦しめてしまつてはいる。それは確かに一つの策かも知れないけれど、探せばもつといい方法は絶対にある。そして、それが、ここ、松本さんちのミカンの木たちなのである。

こここのミカンは、みんな自分の力で悪い虫や病気をなくしていくと、元気にがんばっている。そう、薬の力を借りなくとも、ちゃんとおいしいお日様を実らせることができます。だから、みんな、そんなミカンの木をやさしく見守つていてあげよう。

(西出 香)

### 食いしん坊のルーキーより

お茶、ミカン、温泉——一体何のことでしょう。これに富士山とくれば、そう、私の生まれ育つた(と言つても都市部で育ちましたが)静岡のこと。冬ともなればコタツの上にはミカンを富士山の如く積み上げた鉢がいつも置かれています。その静岡のミカンを、最近私は敬遠しています。品種にもよるのですが、ひたすら大きくて甘いだけで味は水っぽく、外皮はブヨで、全然しまりがないのです。(和歌山のミカン



農業ゼミニュースレター第5号

1993年12月11日京大農業ゼミ発行

〒606 京都市左京区北白川追分町

京都大学農学部農林生物学教室石田氣付